

富士山北麓の繁殖期における クロツグミ・アカハラ・コルリ・ルリビタキの生息状況

西丸 亮宏

(2013 年 9 月 30 日受付 2013 年 12 月 2 日受理)

Distribution and abundance of Japanese Thrush, Brown-headed Trush, Siberian Blue Robin and Red-flanked Bluetail in breeding season at the northern slope of Mt.Fuji.

TAKAHIRO NISHIMARU

要 旨

富士山北麓において、クロツグミ、アカハラ、コルリ、ルリビタキの生息状況を明らかにするため、調査地点を 10 箇所設けて調査を行った。その結果、10 箇所の調査地点のうち、アカハラが 6 地点ともっとも広範にわたって確認された。次いでコルリが 3 地点、クロツグミ、ルリビタキは 2 地点で確認された。対象種の垂直分布について、アカハラ—クロツグミ、ルリビタキ—コルリの傾向が示された。今後はより詳細に環境別に調査点を設け、それぞれの種の選好する環境が明らかにしていくことで、環境の変化が鳥類にどういった影響をもたらすのか。定期的調査を継続していくことが必要であると考えられる。

キーワード：クロツグミ、アカハラ、コルリ、ルリビタキ、繁殖期、富士山北麓

はじめに

富士山北麓において繁殖期に記録されているツグミ類は、西 (2012) によるとクロツグミ *Turdus cardis*, アカハラ *T.chrysolaus*, コルリ *Luscinia cyane*, ルリビタキ *Tarsiger cyanurus* の 4 種が確認されている。また、黒田ほか (1971) がこれらに加え、精進口登山道と吉田口登山道においてマミジロ *Zoothera sibirica*, コマドリ *L.akahige* を、岡久ほか (2012) が青木ヶ原においてトラツグミ *Z.dauma* を確認している。

富士山北麓において、ツグミ類がどのような生息状況を示しているかについての定量的な研究は少ない。さまざまな環境において、ツグミ類がどのような生息状況を示しているかに関する定量的なデータは、それぞれの種にとってどのような環境が重要かを判断するのに欠かせないものである。本論においては、富士山北麓において、直近の調査において確認されているツグミ類 4 種の繁殖期における生息状況を調べ、現在の状況を定量的な記録として残すことを目的とした。これら 4 種の基礎的な生態については、Brazil (1991) や中村・中村 (1995) に詳しい。

調査方法

富士山北麓の山地帯から亜高山帯までの標高 1206 ~ 1873 m の森林に、10 箇所の調査地点を設置した (図 1 の A ~ J)。西 (2012) に基づき、富士山北麓の森林全体を網羅できるよう調査地点を選定したが、効率的な調査実施

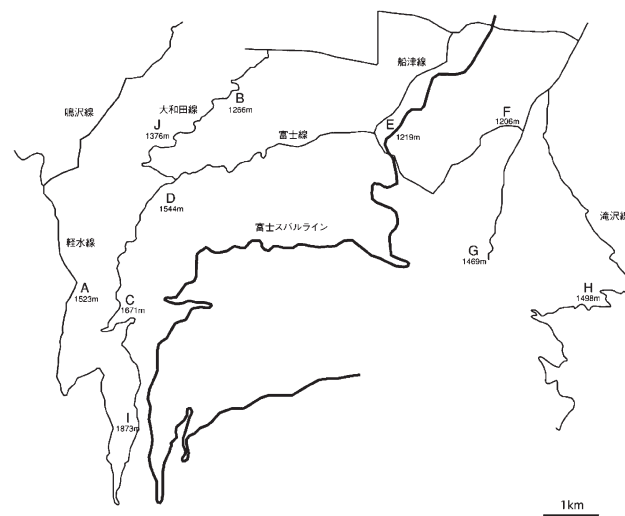


図1 調査地の位置関係と標高
(西 (2012) を参考に著者が作成)

のために林道を利用した。調査は 2013 年 6 月 ~ 7 月に各地点で 5 回 (J のみ 4 回)、スポットセンサス法でおこなった。各地点半径 100 m を対象範囲とし、10 分間の調査をおこなった。調査は晴天・曇天・小雨の日を実施し、範

表1 富士山北麓の繁殖期に確認されたツグミ類の個体数

科名	種名	学名／調査地点・標高	F 1206m	E 1219m	B 1266m	J 1376m	G 1469m	H 1498m	A 1523m	D 1544m	C 1671m	I 1873m
ヒタキ	クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	4								(2)	
	アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>			3(1)	2(2)	5	2(1)	1	2(1)		
	コルリ	<i>Luscinia cyane</i>		6(1)			(1)		1	12	1	
	ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>							1			9(3)

()内は範囲外及び地鳴きのみの確認

表2 各調査地の環境

調査地点	植生	標高(m)
A	カラマツ、シラビソの優占する林。林床はササ類に覆われていた。	1523
B	アカマツ林。疎らにカラマツが混在していた。伐採後の解放空間を含む環境。	1266
C	カラマツ、シラビソの優占する林。ミヤマザクラなどが生え、低木が疎らに生える解放空間を含む環境。	1671
D	シラビソの優占する林。イトマキイタヤ、ウリハダカエデ、ミズナラなどが生え、林床はササ類に覆われていた。	1544
E	アカマツ、ミズナラなどの混交林。ダンコウバイなどが生えていた。	1219
F	アカマツの優占する林。ミズナラ、ダンコウバイなどが生えていた。	1206
G	カラマツ、ヤハズハンノキ、カエデ類の混じる混交林。	1469
H	カラマツ、シラビソの優占する林。	1498
I	シラビソ、コメツガの優占する林。	1873
J	シラビソ林。疎らにカラマツが生えていた。	1376

囲内で確認された対象種4種の種名、個体数を記録した。対象外、範囲外、調査地点の移動中に出現した鳥類についても、可能なかぎり、種名及び個体数を記録した。すべての調査は午前4:00～8:00のあいだにおこなった。調査には、8×25倍の双眼鏡をもちいた。

結 果

調査地内で確認できたツグミ類は、クロツグミ、アカハラ、コルリ、ルリビタキの3属4種であった(表1)。それぞれの種別にみると、クロツグミは山地帯下部のF地点で最も多くの個体が確認された。アカハラは標高1266mのB地点から1544mのD地点まで観察された。コルリは下層植生の密なD地点、E地点の順にもっとも多く確認された。ルリビタキは標高1800m以上の亜高山帯にてもっとも多く個体が確認された。10箇所の調査地点のうち、アカハラが6地点、次いでコルリが3地点、クロツグミ、ルリビタキは2地点で確認された。なお、調査は小雨の日にも行ったが、対象種の出現状況は晴天や曇天の日と変わらなかった。

また調査地点と調査時間ともに対象の範囲外ではあったが、6月23日にBからJへの移動中、トラツグミの鳴き声を確認した。調査地点、調査時間外においても、黒田ほか(1971)が記録しているマミジロやコマドリは確認されなかった。

考 察

今回の調査においてはスポットセンサス法を用いた。平野ほか(2009)によると、ある場所の鳥類の種構成を明らかにするにはラインセンサスに比べスポットセンサスのほうが効率的としている。また、植田ほか(2006)は森林のラインセンサスにおいて生息状況を把握しにくい種として、アカハラを挙げているため、今回はスポットセンサス法を選択した。植田ほか(2005)は、スポットセンサスについて、5分で62.9%、10分で73.7%、15分で93.5%の種を記録し、当該調査を実施する場合、15分の調査を複数箇所に行うことが効率的であるとしている。今回の調査においては調査時間を10分としたが、上記のことからこの調査時間は妥当であると考えられる。

中村・中村(1995)によるとクロツグミは標高1000m以下の山地に生息するとされている。富士山北麓においては、黒田ほか(1976)が標高850～1100m及び920～1100mの調査区間でそれぞれ3個体、標高1260～1560mの調査区間で1個体を確認している。また、西(2012)は標高1220～1265m及び1162～1169mで生息を確認している(ただし、これらの調査はラインセンサス法で行われた)。今回の調査結果においても、標高1206m及び1671mで確認されており、富士山北麓においては中村・中村(1995)の記載とは異なり、標高1000m以上にもごく少数ではあるが生息をしていると考えられた。

今回C地点(標高 1671 m)で確認されたクロツグミは、地鳴きを繰り返しながらササ藪より現れ、さえずることなく道路上を通過した。宮沢(1971)によると、クロツグミは育雛期に入るとさえずり量がきわめて少なくなることが指摘されている。また分布地域にはカラマツ、ヒノキ及び比較的開けた環境を含む(宮沢 1971)とされ、C地点の環境と類似性が見られる。これらのことより繁殖個体の可能性も示唆された。しかし Ishizuka(2009)によると、雄は雛への給餌のための訪巣直前では 59.5%, 離巣直後では 44.6%の機会において小声でさえずることが指摘されている。小声のさえずりのため、聞き取るためには巣からの距離が影響すると考えられるが、黒田(1966)によるとなわばり面積は約 0.75 ~ 4.7 ha と推定されており、なわばり内だとしても聞き取ることができるとは限らない。さらに、クロツグミは良い環境でも孤立したなわばりをつくらず、ある地域に集まるナワバリコロニーをなす社会性がある(黒田 1967, 宮沢 1971)とされており、これらの点から今回の確認個体が繁殖個体かどうかは不明であった。

アカハラがよく観察されたG地点とB地点は、ともに調査地内に開放空間を含んだ明るい林となっており、ギャップ環境(林縁)が生息条件の一つとなっているというこれまでの認識を支持した(Brazil 1991, 中村・中村 1995)。

コルリは下層植生の密な環境で多く確認されたが、A地点においては林床をササ類が覆っていたにもかかわらず、コルリは1個体しか確認されなかった。A地点ではD地点で確認されなかったソウシチョウ *Leiothrix lutea* が確認されており(西 2012, 西丸 未発表)、コルリとの関係性について今後注視していくがある。また田村・上田(2001)の調査において、落葉広葉樹林が優占する調査地(標高 1350 ~ 1450 m)と、針広混交林の調査地(標高 1550 ~ 1650 m)において、コルリのさえずりのピークが異なっていたことが報告されているため、生態的な要因についても検討する必要がある。

対象種の垂直分布に注目すると、由井(1988)は、早池峰山での繁殖鳥類の調査において、小型ツグミ類ではルリビタキーコマドリ・コルリ、大型ツグミ類ではマミジローアカハラ・クロツグミの順に標高的に棲みわけをしているとした。今回の調査結果もおおよそ由井の垂直分布を支持している。

また、藤巻(2008)によると、クロツグミとアカハラの垂直分布には温量指数が関係しているとされ、後者の方が温量指数の低い高標高の環境にまで生息することができるとしている。今回の調査結果からもこの傾向は見てとれる。今後、温暖化等の影響により、両種の生息域が上昇していく可能性も示唆され、引き続き調査を継続していくことが重要であると考えられた。これはルリビタキについても同様である(藤巻 2005)。

今回の調査にあたっては、調査期間が6~7月と繁殖期の後期にあたってしまった点や環境別の調査地点の設置といった点について、精度を欠くものであった。由井(1988)

は、同じ地域、標高であっても林のタイプ(林相)により同一種の密度は変化するとしている。より詳細に環境別に調査点を設けることにより、それぞれの種の選好する環境が明らかになると考えられる。温暖化や森林限界の上昇、世界文化遺産への登録など、富士山を取り巻く環境が著しく変化するなか、そういった環境の変化が鳥類にどういった影響をもたらすのか。定期的調査を継続していくことが必要であると考えられる。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、西教生氏より有用なご助言をいただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

引用文献

- Brazil M A (1991) The Birds of Japan. Christopher Helm, London
- 藤巻祐蔵(2005) 北海道中部・南東部におけるルリビタキの繁殖期の生息状況. 森林野生動物研究会誌, 31:1-4
- 藤巻祐蔵(2008) 北海道中部・南東部におけるクロツグミとアカハラの繁殖期の生息状況. Strix 26:115-125
- 平野敏明・植田睦之・今森達也・川崎慎二・内田博・加藤和明・金井裕(2009) 森林におけるスポットセンサスとラインセンサスによる鳥の記録率の比較. Bird Research 5:1-13
- Ishizuka T (2009) Whisper song in the Grey Thrush *Turdus cardis* immediately before and after feeding their young. Journal of the Yamashina Institute for Ornithology 41:34-41
- 黒田長久・千羽晋示・由井正敏・中村司(1971) 富士山地域の鳥類. (富士急行株式会社堀内浩庵会編) 富士山 富士山総合学術調査報告書. 富士急行株式会社, 東京. pp.856-948
- 黒田長久(1966) クロツグミのなわばり観察. 山階鳥類研究所研究報告 4 (6) (No. 26) :469-480
- 黒田長久(1967) 鳥類の研究—生態—. 新思潮社, 東京
- 宮沢和人(1971) クロツグミの生活史. 山階鳥類研究所研究報告 6:300-315
- 中村登流・中村雅彦(1995) 原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編). 保育社, 大阪
- 西教生(2012) 富士山北麓の繁殖期の鳥類相. 富士山研究 6:45-49
- 岡久雄二・小西広視・高木憲太郎・森本元(2012) 青木ヶ原の繁殖鳥類相. 富士山研究 6:39-43
- 田村實・上田恵介(2001) コルリの繁殖生態. Strix 19:11-20
- 植田睦之・永田尚志・平野敏明・川崎慎二(2005) 関東周辺における森林でのスポットセンサスの効率的な実施方法. 日本鳥学会 2005 年度大会講演要旨集. pp.131
- 植田睦之・平野敏明・神山和夫(2006) 森林と草原におけるラインセンサスの調査回数と確認種数との関係. Strix 24:31-38
- 由井正敏(1988) 森に棲む野鳥の生態学. 創文, 東京

